九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

動きの表現における語用論的要因

大江, 三郎

https://doi.org/10.15017/2332714

出版情報：文學研究. 74, pp.1-15, 1977-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

動きの表現における語用論的要因

大　江　三　郎

1.　まえがき

日本語の「来る」「行く」英語の come, go および bring, take は動きといっても話し手にとっての動きを表わす語であるために，これらの動詞の用法は「語用論的要因の，ことばの形式への影響」という見地から非常に興味深い問題を提起してくれる．私はこれまで，もう何度もこれらの動詞の用法に関してこの問題を取り上げたが，ここにもう一度同じ問題をいくぶん新しい角度から考察する．ここで扱われる形式は，次の四つおよび対応する英語の形式で，いずれもYが動きを眺める視線の軸，話し手の「私」である場合である．

Xが Y について来る／行く

Xが Y といっしょに来る／行く

Xが Y を送って来る／行く

Xが Y を連れて来る／行く

2.　ついて来る／行く

「ついて来る」と「ついて行く」は前者が「私に～」後者が「私以外の人に～」を意味するのがふつうである．1，2の a の命令文がそのとおりであることは，対応する b の英文からも分る．

1.　a.　ついて来なさい．

　　b.　Come along (with me) .

2.　a.　ついて行きなさい．

　　b.　Go with him (,etc) .

1 aの前に一人称でなく三人称を，2 aの前に三人称でなく一人称を補えるような場合は考えにくい．「ついて来る」では話し手自らが動きながら動きを眺めるが，「ついて行く」では話し手は動きの外に立ってその動きを眺める．このことは，クルとユクの基本的用法では動きを眺める視線の軸がそれぞれ「到達点に位置する話し手」「出発点に位置する話し手」であるという事実とパラレルである．[1)]

次の，未来と過去のできごとを表わす文でも，「ついて」が「私について」の場合，一般にクルの方がよく，ユクを用いると「私以外の人について」の意味にとられる．「大阪まで」のような到達点を表わす句が入っても事情は同じである．

3. a. 彼はあしたついて来ます/*行きます．
   a'. He will{come/*go} along tomorrow.
   b. 彼はあした大阪までついて来ます/*行きます．
   b' He will {come/*go} along as far as Osaka tomorrow.
4. a. 彼はきのうついて来ました/*行きました．
   a'. He {came/*went}along yesterday.
   b. 彼はきのう大阪までついて来ました/*行きました．
   b'. He {came/*went} along as far as Osaka yesterday.

しかし「ついて」の前に「ぼくに」が入ると事情は変ってくる．

5. 彼はあしたぼくについて来ます／行きます．
6. 彼はきのうぼくについて来ました／行きました．

未来，過去，いずれのできごとをさす場合でもクル，ユクともに完全によくなる．ところが命令文では，次の例から分るとおり「ぼくに」を明示的に加えてもやはりクル/*ユクである．

7. ぼくについて来なさい/*行きなさい．

以上のデータは次のことを示していると思われる．日本語で話し手をさす一人称代名詞はしばしば省略されるが，一人称代名詞が表面的に「私」などとして現われるかゼロであるかは，話し手が発話の時に自己を客体と

して反省的に捉えるか，直接的主体的に把握するかの違いによる．例えば「ああ疲れた！」という感嘆文と反省的に述べられる平叙文「ぼくは疲れています」とを比べよ．[2]「XがYについて来る／行く」はXが，動くYに同伴して動く時に，その動きを表わすために用いられる．Yが話し手の時，一人称代名詞が現われるか省略されるかはやはり上の違いを反映するといえる．「ついて来る」は動くYである「ぼく」が動きながら伴うXの動きを眺めていることを示し，動きを眺める「ぼく」と動く「ぼく」とは一体である．それに対して「ついて行く」では「ぼく」は動きの外に身を置いてXのみならず「ぼく自身」Yの動きをも外から眺める．そのように外から客体的に眺められる「ぼく自身」は省略されず表面に現われる「ぼくに」によって示される．以上が，3，4でクル/*ユク，5，6でクル／ユクになるということの理由である．次に5，6と7の違い，つまり命令文では「ぼくに」が明示的に現われてもユクが用いられないという事実は命令文の特徴から説明される．命令文，厳密には命令文を発することにおいて遂行される「命令」という発話内行為（illocutionary act）はいくつかの成立条件を有する．[3] 7をいうことにおいて遂行される命令という行為はその成立条件の中に「聞き手が話し手の未来の動きに伴って動くことを話し手は望んでいる」ということを含む．この条件の存在は，聞き手の期待願望される動きを話し手の動きと切実に結びついたものとして話し手に知覚させる．つまり動く話し手の視点から聞き手の動きを知覚させる．これに対して5，6を発することによって遂行される「陳述」または「予測」という行為では上のことは条件として存在しないから，聞き手の動きと話し手の動きの結びつきの切実さの程度が違う．ところで3，4が上に述べた理由でクル/*ユクになるということは無制限にいえるわけではない．その場の状況から，あるいは先行する発話から，「私」が行くこと，あるいは行ったことが聞き手にも十分知られている場合には，「私に」を落として3，4のa，bをユクでいい表わすことができる．このような一人称代名詞の省略は，上にみた「自己の直接把握による一人称代名詞の省

略」とともに，統語的には基底構造に存在する同一名詞句消去とみなされようが，語用論的には性質を異にする．[4] そしてこの違いがクルとユクの違いになって現われる．ところで1の命令文は，状況や前後関係によってユクとなり「ついて行きなさい」が「私について」を意味することになるというようなことは，まずないであろう．上に述べた命令文の特徴は非常に強く，コンテクストの，抗する力を抑えてしまうと思われる．

命令文ではクル/*ユクになる傾向が強いことが明らかになったが，命令文でさえも「ぼくに」のほか到達点の「大阪まで」のような句を明示的に加えると事情は変ってくる．

8. a. 大阪までぼくについて来なさい／行きなさい．
   b. ぼくについて大阪まで？来なさい／行きなさい．

「ついて来る／行く」がまとまっているaではクル，ユクともよいが，bにおけるように「大阪まで」によって「ついて」が分離されるようになるとクルはいくぶん悪くなってしまう．この直観は少なくとも私の日本語ではかなりはっきりしている．そして面白いことに，未来のことを述べる9が8とパラレルであるのに，過去のことを述べる10ではクル，ユクともによい．

9. a. 彼は大阪までぼくについて来ます／行きます．
   b. 彼はぼくについて大阪まで？来ます／行きます．

10. a. 彼は大阪までぼくについて来ました／行きました．
    b. 彼はぼくについて大阪まで来ました／行きました．

8，9，10にみられることは，対応する英語の文にも部分的にはみられる．8'，9'，10'はそれぞれ8，9，10に対応する英文である．

8'. a. {Come/*Go} along with me, to Osaka.
    b. {*Come/Go} to Osaka, along with me.

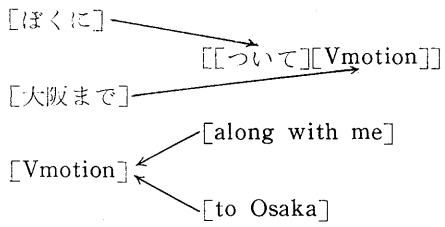
9'. a. He will {come/*go} along with me, to Osaka.
    b. He will {*come/go} to Osaka, along with me.

10'. a. He {came/ went} along with me, to Osaka.

b.　He {came/ went} to Osaka, along with me.

上の英文でコンマは下降調イントネーションを示し，ピリオドにして二文にしてもよいところである．そのあとの to Osaka, along with me はあとから思いついてつけ加えられた句 (afterthought) であることが多い．

命令文が表わすできごとも未来にかかわるのであるから，8と9がパラレルであることは容易に理解できる．未実現の（未来に完了すべき）動きを，動きが完了する点，到達点に話し手が視点を置いて眺めることにはいささか無理がある．従って8，9のbでクルの使用には問題がある．これに対して10が描くのはすでに実現した，過去の動きであるから動きの完了点の到達点に位置して眺めることは十分可能である．従って10bでクルの使用はよい．このような問題がbで起き，aで起きないのは，bでは到達点を表わす句「大阪まで」が動きの動詞の直前に来て，上記の視点の問題をひき起こしがちだからである．これに対してaでは「ついて」が動きの動詞から切り離されず，いっしょに動く話し手が自ら動きながら他者の動きを眺めることを可能にする．なお8，9と8'，9'という対応する日英語の文で動きの動詞の使用が単に部分的に似るのみでかなり大きくくい違うのは，次のように示される意味的な結びつき方の違いに起因するように思われる．



(Vmotion＝動きの動詞．クルかユクまたはcomeかgoに実現する)

「ついて」は動きの動詞と緊密に結びつき一種の複合動詞を形成し，さらに意味的にみて「ぼくに」はその中の「ついて」と，「大阪まで」は動きの動詞と緊密に結びつく．従って表面的に「ついて」と動きの動詞との間

に「大阪まで」が入っても，「（ぼくに）ついて」と動きの動詞との意味的結びつきの強さの故に，話し手の視点から動きを眺めることが依然可能である．（8，9のbでクルの使用可能）また「大阪まで」がこのように割り込まず「ぼくについて」の前に置かれても，それと動きの動詞との意味的結びつきの緊密さから，動きが外から見た到達点への動きとみなされ得る．（8，9のaでユクが可能）これに対して英語では along with me と to Osaka の動きの動詞への意味的結びつきの強さが同じであるため，表面的にどちらが動詞の直後に来るかによってcome, goいずれか一方のみが使用可能となる．

要するに，8—10でクルを用いると話し手自身動きながら他者の動きを眺めるが，ユクを用いると話し手は自ら動く人としてよりも外に（この場合到達点でなくむしろ出発点に）身を置いて他者の動きを眺める．この事実をわきまえると11の例も納得がいく．

11.　彼はぼくについて大阪まで｛来ました／？行きました｝が，その先はぼくがひとりで旅行しました．

前半は10bの文である．「が……」以下がつくとクルの方がユクよりよくなる．クルにはすでに述べたように（動きを眺める人としての）「ぼく」自身の動きが示唆される．従って後半で述べられる「ぼく」の動きとつながりがよい．それに対してユクを用いると「ぼく」自身の動きが出ないから，前半と後半がちぐはぐになる．

次に，12は桃太郎の童謡の一節である．

12.　これから鬼の征伐についていくならやりましょう．[5)]

この中の「鬼の征伐に」は上の到達点を表わす句「大阪まで」などと明らかに似ており，3b，4bと同じ型の文である．3b，4bとの比較を容易にするために13の平叙文をみよう．

13.　a.　彼はこれから鬼の征伐について来ます／行きます．
　　b.　彼は鬼の征伐について来ました／行きました．

3b，4bではまずクル/*ユクという直観を与えたが，そのあとでコンテ

クストの支えがあればユクもよくなることを指摘した．12，13のクル／ユクという直観は，同様コンテクストの支えがある場合のそれであり，コンテクストの支えがなければ12，13も３ｂ，４ｂ同様クル/*ユクとなるであろう．童話では，桃太郎は鬼征伐に行こうとしていることが服装その他から動物たちには明らかである．このコンテクストのおかげで12ではユクが用いられたとみられる．もちろんここはクルであっても構わない．事実，クルの方がよい，標準的歌詞はクルであると考えている人も多い．しかし私は次の理由でここはユクの方がよいと思う．「鬼の征伐に」という句は「大阪まで」のような到達点を表わす句と異なり，意図された目的を表わす．この目的が話し手（＝桃太郎）だけでなく聞き手（＝動物たち）のものでもあることを示すため，動きが聞き手の意志によって生じさせられた，上記目的を果すための聞き手の意図的行為だということを示す必要がある．そのために（動く）話し手の視点を抑えて動きを眺めればユクが現われる．12では，後半の「やりましょう」が表わす（聞き手への）約束が聞き手の意図的行為を条件とするのであるから，聞き手の行為，ここでは「動き」が意図的であることがきわ立つ方がよい．その点でユクの方がよい．12のユクの文，およびそれにクルを置きかえた文の対応する英文は，12' a, b の如くなるであろう．

12'. a. If you will go to annihilate the ogres, together with me,…

b. If you will come (along) with me, to annihilate the ogres,…

英語では，ここでも語順と afterthought intonation が重要であるといえる．

3. いっしょに来る／行く

同伴する動きを表わす句に「いっしょに来る／行く」がある．まず，次は命令文の例である．

14. a. いっしょに来なさい/*行きなさい．

b. {Come/* Go} with me.

明らかに「ついて来る／行く」の命令文１，２とパラレルで，「私といっ

しょに」を意味する場合にはクルしか使えない．ユクを用いれば「私以外の人といっしょに」の意味になる．しかし，未来や過去のことを表わす次の平叙文では事情が全く逆になる．15，16と3，4とを比較せよ．

15. a. 彼はあしたいっしょに*来ます／行きます．[6)]

b. He is {*coming/going} tomorrow, together with me.

16. a. 彼はきのういっしょに*来ました／行きました．

b. He {*came/went} yesterday, together with me.

「いっしょに」の前に「ぼくと」が明示的に入っても全く同じく *クル／ユクである．そして命令文でも，14と異なり，ユクがクルと並んでよくなってくる．14と17を比較せよ．

17. ぼくといっしょに来なさい／行きなさい．

このパターンは到達点を明示する「大阪まで」のような句が入っても（正しいどの位置に来ても），変らない．次の例をみよ．

18. a. 大阪までぼくといっしょに来なさい／行きなさい．

b. ぼくといっしょに大阪まで？来なさい／行きなさい．

19. a. 彼はあさって大阪までぼくといっしょに*来ます／行きます．

b. 彼はあさってぼくといっしょに大阪まで*来ます／行きます．

20. a. 彼はおととい大阪までぼくといっしょに*来ました／行きました．

b. 彼はおとといぼくといっしょに大阪まで*来ました／行きました．

19，20の平叙文ではやはり*クル／ユクである．[7)]

このように，クル，ユクの使用に関して「XがYについて〜」と「XがYといっしょに〜」が相違するのは，XとYとの空間的（それにおそらく時間的）配置が，両表現において違って捉えられるためであろう．21と22はその違いを図示する．（矢印は動きの方向を示す．）

21. XがYについて〜 (X)(Y)⟶

22. XがYといっしょに〜 (X Y)⟶

同じく「同伴する動き」といっても，動きの方向に向って21ではXがYのあとに位置するのに，22ではそのような前後関係はなく，XとYが同位置に並んでいる．21の場合，Yが動きを眺める視線の軸の話し手である時，YがXの動きを眺めるためにはYはXの方に向かねばならない．従って動きの動詞はクルとなる．§2の文における「ついて来る」がそれである．時に「ついて行く」が用いられたのは，そこで述べたように話し手が外に身を置いて動きを眺めたからである．22の「いっしょに」の場合そのようなことはないのだが，命令文では「いっしょに」のあとにクルも現われている．特に14ではクル/*ユクであった．それは前節でみた命令文における「聞き手の動きと話し手の動きの結びつきの切実さ」が22に示される空間的配置の知覚に勝ったためである．14の命令文では「ぼくと」の省略から分るように，いわば前提される話し手の動きへの，聞き手の動きの結びつきを求める気持がとりわけ強かったのである．なお22の空間的配置の知覚の方が勝ち，話し手の動きが前提されず聞き手の動きと話し手の動きを一体化したものとして求める気持が表現されれば，命令文でない23の文が現われる．23の発話内行為は勧誘（exhortation）であろう．

23. a. いっしょに行こう
    b. Let's go (together).

4. 「送って来る／行く」と「連れて来る／行く」

前節の21，22に示した「XがYについて〜」と「XがYといっしょに〜」との空間的配置上の違いにパラレルなのが，「XがYを送って〜」と「XがYを連れて〜」の空間的配置上の違いである．特に「連れて〜」と「いっしょに〜」の類似は強い．次の24，25と15，16，19，20を比較せよ．ともに*クル／ユクである．

24. 兄さんが［ぼくを］駅まで［ぼくを］連れて *来て／行ってくれます．[8)]

25. 兄さんが［ぼくを］駅まで［ぼくを］連れて *来て／行ってくれました．

ただ命令文ではパターンがいくぶん違う．26，27と14，17，18を比較せよ．

26.　（ぼくを）連れて*来て／行って下さい．

27.　［ぼくを］駅まで［ぼくを］連れて *来て／行って下さい．

「いっしょに」の場合と違ってクルは常に悪い．これは次の理由による．「XがYといっしょに〜」のXとYとの配置は前節22の如くであったが，YはX同様自らの動きを自らの意志でひき起こす．従って命令文では，前節で述べた理由で，話し手であるYが自ら動きながらXの動きを眺めることが可能であり，この時クルが用いられる．これに対して「XがYを連れて〜」では，Yは自らの意志で自らの動きをひき起こすことはできず，それはもっぱらXの意志によってひき起こされる．従ってYがまず自ら動きながらXの動きを眺めることはできない．[9] それ故クルは用いられない．

「Yが自らの動きをひき起こす自らの意志を有するか否か」は，実は「XがYについて〜」と「XがYを送って〜」の違いをも形成する．[10]「XがYを送って〜」では，話し手であるYは自らの動きをひき起こす自らの意志をもたず，Yの動きはもっぱらXの意志に依存するのであるから，動きを眺めるYの視線はXの方に向いており，動きは常に「Y（私）の方に」である．従って常にクルがよい．このように推測されよう．この点で私の直観は十分明瞭ではないが，どうも事実はそうではないらしい．次の28の命令文ではクル/*ユクだが29，30，31ではクルと並んでユクもほとんど同程度にノーマルである．

28.　送って来て/*行ってくれ．

29.　あしたは［ぼくを］駅まで［ぼくを］送って来て／行ってくれ．

30.　彼が［ぼくを］駅まで［ぼくを］送って来て／行ってくれます．

31.　彼が［ぼくを］駅まで［ぼくを］送って来て／？行ってくれました．

28におけるように話し手が他者Xの動きが直ちに起こることを切実に期待する場合以外は，話し手が外からXの動きを眺めることができるようにみえる．これは，話し手が自ら動きながら他者の動きを同伴的動きとして眺めることは比較的困難なことで特に促進的要因を必要とするのに対し，他

者の動きを外から眺めることは相対的に容易であるという知覚上の事実があるからではないかと思われる．命令文でも，「あしたは」が用いられ，「ぼくを」が明示的に現われるゆとりのある命令を表わす29ではユクも用いられることに注目すべきである．[11)]

5. まとめ

以上のデータから，ここで問題にした句の中でのクルとユクの選択をきめる語用論的要因——言語使用者，話し手の動きに対するなんらかの心的態度にかかわる要因——は次のようにまとめることができる．

a. 話し手の「私」が他者の動きをひき起こす意図を有するか否か，つまり「私」の動きと他者の動きの結びつきが切実なものとして知覚されているか否か——命令文か否か．

b. 他者の動きがその人自身の意図的目的と緊密に結びついている，それによってつき動かされているという知覚があるか否か——「鬼の征伐に」のような目的句との共起の有無．

c. 動く「私」と他者との空間的配置が「前後」として知覚されるか「同一，一体」として知覚されるか——「ついて」「送って」対「いっしょに」「連れて」．

d. 「私」の動きが「私」自身の意志によって起こると知覚されるか，もっぱら他者の意志に依存していると知覚されるか——「ついて」「いっしょに」対「送って」「連れて」．

e. 話し手の動きが直接的主観的に知覚されているか否か——一人称「ぼく(に)」などが文脈と無関係に省略されるか否か．

f. 他者の動きが「私」に同伴する動きとしてよりも到達点への動きとしてより強く知覚されているか否か——「大阪まで」のような到達点を表わす句が表面的に存在するか否か，さらにそれがクル／ユクの直前に割り込むか否か．

g. 動きが未完結の，つまり到達が未来に生ずるものとして捉えられているか，それとも到達が過去にすでに完結したものとして捉えられている

か――命令文や未来の平叙文か，過去の平叙文か．

上で，ダッシュの右に示したのがことばの形式上の特徴であるが，これがダッシュの左の，話し手の心的知覚的特徴をよく反映する．この語用論的特徴（形式的特徴に反映される）が，話し手が他者Xの動きに対しどのように面するか，それを自分への動きとして捉えるか自分からの動きとして捉えるかをきめる．そしてこの違いが結局クルとユクの違いになって現われる．上の特徴はすべて「AかB（多くの場合，－A）」という形式で与えられている．gはfについてAである場合にのみ必要である．この点を除くと上の特徴はすべて組み合わさるが，その組み合わせのぐあい――組み合わさるのが各特徴についてAかBか――が最終的なクル，ユクの使用可能性をかなり規則的にきめる．[12)]

また，ここのデータは主として日本語であり，英語については断片的にしか述べなかったが，上の要因のうちc，d，eを除くものは英語にもよくあてはまると思われる．英語では日本語におけるほど消去が自由でないからeの特徴は非常に弱い．またfに関しては語順が英語と日本語では逆になるので，日本語の「直前」が英語の「直後」となる．また英語ではコンマやイントネーションによって示されるafterthoughtという特徴が重要になる．次に，c，dの特徴が英語にあてはまるとは考えにくい．21，22に図示した「ついて～」対「いっしょに～」の配置知覚上の違いは英語にはなく，ともに視点の違いに応じて）{come／go}along with～となる．また日本語におけるパラレルな違いである「送って～」対「連れて～」も英語には存在せず，ともに（視点の違いに応じて）bring～／take ～で表わされる．かくして日英語間に次の対応ができる．（{ }が英語1対日本語2であることに注意）

$$\text{Xが}\left\{\begin{array}{l}\text{Yについて}\\ \text{Yといっしょに}\end{array}\right\}\left\{\begin{array}{l}\text{来る}\\ \text{行く}\end{array}\right\}\text{――}\ \text{X}\left\{\begin{array}{l}\text{come}\\ \text{go}\end{array}\right\}\ \text{along with Y}$$

$$\text{Xが}\left\{\begin{array}{l}\text{Yを送って}\\ \text{Yを連れて}\end{array}\right\}\left\{\begin{array}{l}\text{来る}\\ \text{行く}\end{array}\right\}\text{――}\ \text{X}\left\{\begin{array}{l}\text{bring}\\ \text{take}\end{array}\right\}\ \text{Y}$$

縦の欄どうしの相違は日英語で性質を異にする．「ついて～」と「送って～」，「いっしょに～」と「連れて～」の違いはYの動きがY自身の意志に依存するか否かをめぐってのものであり，きわ立つ動きはどちらもXの動きである．これに対して英語でこれに対応する単純化された違い，come/go と bring/take の違いは，きわ立つのが前者でXの動き，後者でXのみならずYの動きでもあるという点である．

（注）

1) Charles J. Fillmore, *Santa Cruz Lectures on Deixis 1971*, Indiana University Linguistics Club, 1975, 特に Chapter 6.

大江三郎「日英語の比較研究――主観性をめぐって――」南雲堂，1975，§§ 1.1，1.2，2.4.

2) 大江，前掲書，§§ 7.2，8.4.

3) John R. Searle (*Speech Acts : An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge University Press, 1969, chapter 3) はある発話内行為の成立条件を preparatory conditions と sincerity conditions に分けた．厳密には，ここの条件「話し手が聞き手にある行為をすることを望む」というのは sincerity condition で，具体的なその行為の内容「聞き手が話し手の未来の動きに伴って動くこと」はpropositional content である．

4) 「コンテクストによる一人称の省略」では左にある名詞句が右にある同一の名詞句を消去する．そのためには同一名詞句消去が文のレベルを超えた談話のレベルで適用されることを許容することになる．あるいは，同一名詞句消去に「前提」の問題がからんでくる．いずれにせよ従来の統語論的わくぐみを根本から修正することが必要になる．「直接的，主観的把握による一人称の省略」は，おそらく J. R. Ross ("On Declarative Sentences," *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum, Waltham, Ginn, 1970, pp 222-272)の考える一番高い遂行節 (highest performative clause) 中の一人称主語が，下位のSに支配される一人称を消去するひとつの場合と考えるのであろう．J. L. Morgan ("Some Interactions of Syntax and Pragmatics," *Syntax and Semantics* 3, ed. by P. Cole & J. L. Morgan, Academic Press, 1975, pp. 289-303) が指摘する意味統語論と語用論の接触に対する二つの可能なアプローチのうち，上の考えは，この随意的消去変形が「語用論的に無色透明ではない」とする方のアプローチだということになる．（→注12）

5) 「やりましょう」といういい方には問題がある．「やろう」か「あげましょう」

がよく，ここでは前者が適当である．リズムの関係でこのようになったのであろう．

6）「彼はあしたいっしょに来ます」は，話し手が発話時に到達点にいる場合，つまり「ここに来ます」の意味であればもちろん正しい．その場合にはユクは用いられない．

7）*クル／ユクは，あとに文が続かない場合である．「彼は大阪までぼくといっしょに来て，それから…」というふうに，あとに文が続く時，クルはユク同様用いられる．この場合，いわば後続するできごとの視点から先行するできごと，動きが眺められているといえる．この興味深い現象については別の機会に論ずる．次に注 6）の場合と同様話し手が発話時に到達点「大阪」にいる場合，19，20はクル/*ユクとなる．さらに，面白いことに話し手が発話時に福岡にいて出発点が東京であるような場合（あるいはその逆の場合）には，クル／？ユクぐらいになる．このことに関連して次の例を考察するとよい．

A．（話し手が発話時に福岡にいる）

（I） ぼくは来月東京から大阪まで｛来ます／？行きます｝

（II） ぼくはあの時東京から大阪まで｛来ました／？行きました｝

B．（話し手が発話時に大阪にいる）

（I） ぼくは来月東京から福岡まで｛*来ます／行きます｝

（II） ぼくはあの時東京から福岡まで｛*来ました／行きました｝

日本人には，東京，大阪，福岡が東から西へ一線上に並ぶとして意識されているためであるが，そうするとクル，ユクの使用を，話し手の視点が到達点にあるか出発点にあるかによって説明するよりは John Kimball (*The Grammar of Facing*, Indiana University Linguistics Club, 1974) が立てる話し手の向き（facing）という基本的概念を導入してこれらの動詞の使用を説明する方がよいように思われる．「向き」の概念は動きを眺める視点そのものが動く「ついて来る」come along の用法にも有効であろう．A，Bにみられるような用法は英語の come, go にもあてはまる．A，Bにみられるような，クル，ユク，come, goの用法があることは，南カリフォルニア大学の柴谷方良氏によって指摘されたものである．

8）［ぼくを］は，「ぼくを」という句がそのいずれかの位置に来ることができるという意味である．以下［　］はすべてそのように用いられる．「連れて行く／来る」，「送って行く／来る」は一般に恩恵的行為を表わすので，それを明示するために補助動詞のヤル，クレルがつくのがふつうである．このように恩恵を明示する傾向（逆に被害を受身によって表現する傾向）は日本語の特徴である．「ついて～」や「いっしょに～」は必ずしも恩恵的行為ではないのでクレルの付加は必ずしも必要ではない．次に，「兄さんがぼくを駅まで連れて来て電車に乗せてくれます／くれました」のようにあとに後続のできごとを表わす文が続く時にはクルも用いられる．（→注 7））

9）このことは21，22に示されたような配置が時間的なものであることを示唆する．クル，ユクなどが表わす動きの知覚はいわば空間時間的であるという考えは別の機会にさらに掘り下げたい．（→注11））

10）ここで問題にしているものとみかけが同じ句「送って来る」が「彼が｛写真／本｝を送って来た」にみられる．このような文においては，送られる品物の動きが，それを送る人の動きに移しかえられたと解釈できる．（本論で問題にする「私」の動きに同伴する動きはない．）このような意味の移しかえについては，大江三郎『意味の移しかえについて』「文学研究」73（九州大学文学部），1976，pp.39-53参照．

11）ユクの使用は29，30と比べ31ではいくぶん悪いと私には感じられる．それはひとつには§2で述べた，動きが過去（既完了）のできごとか未来（未完了）のできごとかに起因する．しかし，未来の動きは時間のスケール上で話し手が位置する点（現在）からの動きであるということも重要な原因であるように思われる．

12）いわゆる意味統語論部門と語用論部門との相互影響を考えるには，Morgan（“Some Interactions of Syntax and Pragmatics”）がいうとおり，①「語用論部門が文法から自由ではない」とするか②「意味統語論部門が語用論的に無色透明ではない」とするかの二つのアプローチがある．ここでの議論は主として①によっているといえるが，②の可能性も決して否定されるものではない．Morgan の論文も，①②のいずれを採るべきかについての断定を困難にするようなデータが存在することを示す．